

北支戦線に従軍して

秋田県 篠村 健 逸

私は大正十二（一九二三）年二月十五日、秋田県大館市に生れ、第一人、妹二人の四人兄弟の長男で、釈迦内小学校を卒業した後、青年学校で五年間、主に軍隊入隊前の予備教育と言うか、訓練を受けておりました。

当時、我が家には祖母と父母そして私達兄弟四人の七人家族で、水田約二町歩、畑一反歩を父母と私の三人で耕作していました。

当時、東北秋田の我が郷里にも、ひしひしと戦雲の厳しさが日増しに感じられるようになり、物資はすべて配給制となり、我々が生産した米は強制的に供出米として出荷させられ、生産農家も余剰米ですら自由にならない状況となりました。

町の人々は配給米では足らず、リュックを背負って農家に米の買い出しに来られたのです。我々

生産農家は食べる米はあっても、今日のような種々雑多な調味料には事欠きました。

昭和十八（一九四三）年の田植期でした。釈迦内小学校講堂において徴兵検査が実施され、その結果は第一乙種合格でした。第一乙種でも繰り上げ入隊となり、昭和十八年十二月一日、弘前歩兵第十六連隊に、北支派遣独立混成旅団北第二九七三部隊歩兵第二七部隊要員として約二週間入隊、外地に出発する日まで客員としていました。

毎日家族が面会に来て、重箱にいろいろな食べ物を持って来てくれました。面会所は毎日満員で「元気で奉公してこい」と励まされ、ぐっと胸に来たことなどが思い出されます。

昭和十八年十二月十五日、待ちに待った戦地行きとなったのです。午前二時非常呼集ラップで起こされ、完全軍装に身を固め営庭に整列、外地からの初年兵受領者の指揮にて真暗い営庭から弘前駅へと行進しました。すべて隠密裏に行動せよとの上部の命令でしたが、それでも家族等はそれぞ

れ別れを惜しんで駅に来ていました。

軍用列車で一路博多港へと向い、途中三回ぐらい停車して、地元の婦人会の方からのお茶のサービスを受けました。博多港より乗船して朝鮮の釜山に上陸、そしてまた汽車に乗り一路北へ北へと走りまりました。

満州の一月と言えば酷寒です。小便をすると、すぐツララになってしまうほどの寒さでした。零下三〇度と言う、いくら寒い東北でも三〇度は考えられない。列車は途中瀋陽に着き約二十分休憩をして再び出発、列車は南下して満支国境の山海関を通過、右手に万里の長城を眺めながら列車は河北省天津にて他部隊は下車し、我々は山東省広暁県に駐屯していた大隊本部に到着しました。

私達初年兵は青森、岩手、秋田県の出身者で約六十人、兵舎の前には古参兵が出迎えていましたが、その古参兵のほとんどは北海道出身でした。古参兵の方々は大部分の方々が警備に出っていたので、出迎えた方々は小人数でした。いよいよ第一

戦に來たのだなと感じられました。

山西省は山また山、見渡す限り山ばかりで、しかも海拔二千メートルの高原地帯という。寒さは一層厳しく、いよいよここで軍隊生活の第一歩を踏み出す事となりました。内地では青年学校で週三日の軍事訓練を受けていたので、銃の取り扱い等はへまをすれば別ですが苦労ではありませんでした。また内務班のことは初めてでしたが、古参兵のほとんどが警備に出っていたので、さほどの厳しい内務班教育はありませんでした。初年兵の一期教育も短期間の三カ月で終わり、私は第五中隊第一班に配属され、いよいよ一人前の兵隊として分哨警備等に就いていました。

昭和十九年五月に新しい初年兵が入隊して來ましたので、私は初年兵教育の助手に任命され上等兵に進級致しました。我々独立歩兵大隊は第一戦の作戦要員ですので、後方からの補給があまりないので、現地調達、自給自足という生活状態でした。北支派遣軍も南方や満州方面が手薄となった

ため、関東軍等への転出などがあつたのを察知してか、時々八路軍の襲撃等があるようになりました。

部隊は昭和十九年七月、老河口に集結した敵を攻撃、多大な損害を与えたのでした。そして我々はこの河北省老河口の警備をすることとなりました。しかし、警備隊は手薄になり犠牲者も出て兵力は少なくなる。住民は情報を八路軍に知らせていたので、その少ない兵力の所へ八路軍は襲撃して来るのです。毎日のように銃砲声がしていました。

そのころ我が鉄道交通攪乱のため、重慶方面から米軍機が毎日飛来し、昼間は鉄道交通による輸送は出来ず避難し、夜間細々と局地的に運行する程度で、幹線の機能は喪失している状態でした。しかし当時、沖繩には米軍が上陸して激戦中との情報がありました。

部隊は敵の反抗を予期して付近の部落掃討を行い、また新鄭、許昌、注馬店を攻撃、多大の戦果

を得ましたが、また我が軍にも尊い犠牲者も出る結果となつてしまいました。河南作戦以後は敵の兵力も多くなり我が軍の損害が多くなつたようでした。

八月十日前（ソ連参戦のころ）ポツダム宣言による、我が国の無条件降伏の情報がソ連や重慶政府から中国全土に流布されるまで、我が軍に協力的だった汪政府系機関も浮き足立って、保安隊等も敵側に寝返るようになったのです。

日本軍の無条件降伏を知つた八路軍は兵器を蒋介石軍に渡さぬよう攻撃を開始して、国府軍と共産軍との紛争が表面に出てきて、蒋介石国府軍は戦後日本軍を共産軍討伐に使用したのです。共産軍は我が警備隊の至近にまで進攻して銃撃を加えて来ましたが、我が軍の反撃にて遺体を残して敗走しました。この戦鬪においても我が軍にも多少の負傷者が出ました。

ついに八月十五日の終戦となり、河南省廓城県に集結、同地で約一年八カ月の抑留生活をし、毎

日戦争で破壊された道路の補修や住宅の改修工事等の使役に出っていました。

昭和二十一年四月六日、上海より乗船、同九日、佐世保に上陸、復員完結して郷里へ帰ることができました。

敗兵となった我々には出征の時とは異なり、近隣の方々の出迎えとてなく寂しいものでした。しかし家族は皆元気で、無事で帰った私を喜んで迎えてくれました。しばらく休養の後、父に代って農家を営み、今日に至っております。

今考えるに、戦争が起こす兵隊の労苦は筆舌に尽くし難いものです。戦争の無い六十二年間の平和な日本、これからも末永く平和であることを願います。

北支警備

秋田県 日 沼 富治郎

私は大正十二（一九二三）年七月二十五日、秋田県八森町という鉱山の町の社宅で生まれました。

父親は花岡鉱山の鉱夫として同和鉱業会社の社宅に住んでおりました。私は尋常高等小学校を卒業して父と同じ会社に就職して鉱山の鉱夫として働きました。この鉱山は銅をはじめ金や銀の鉱石等も採れるので事業は繁栄しておりました。途中から私は工務課電気係に配属されて、鉱内の配線工事等に従事して働きました。弟も学校を出て同じ会社に就職し、我々は父と三人で勤務しておりました。

昭和十八（一九四三）年、私は二十歳になったので徴兵検査を受け、甲種合格となりました。そして昭和十九年三月一日に秋田歩兵連隊に現役兵として入隊しました。